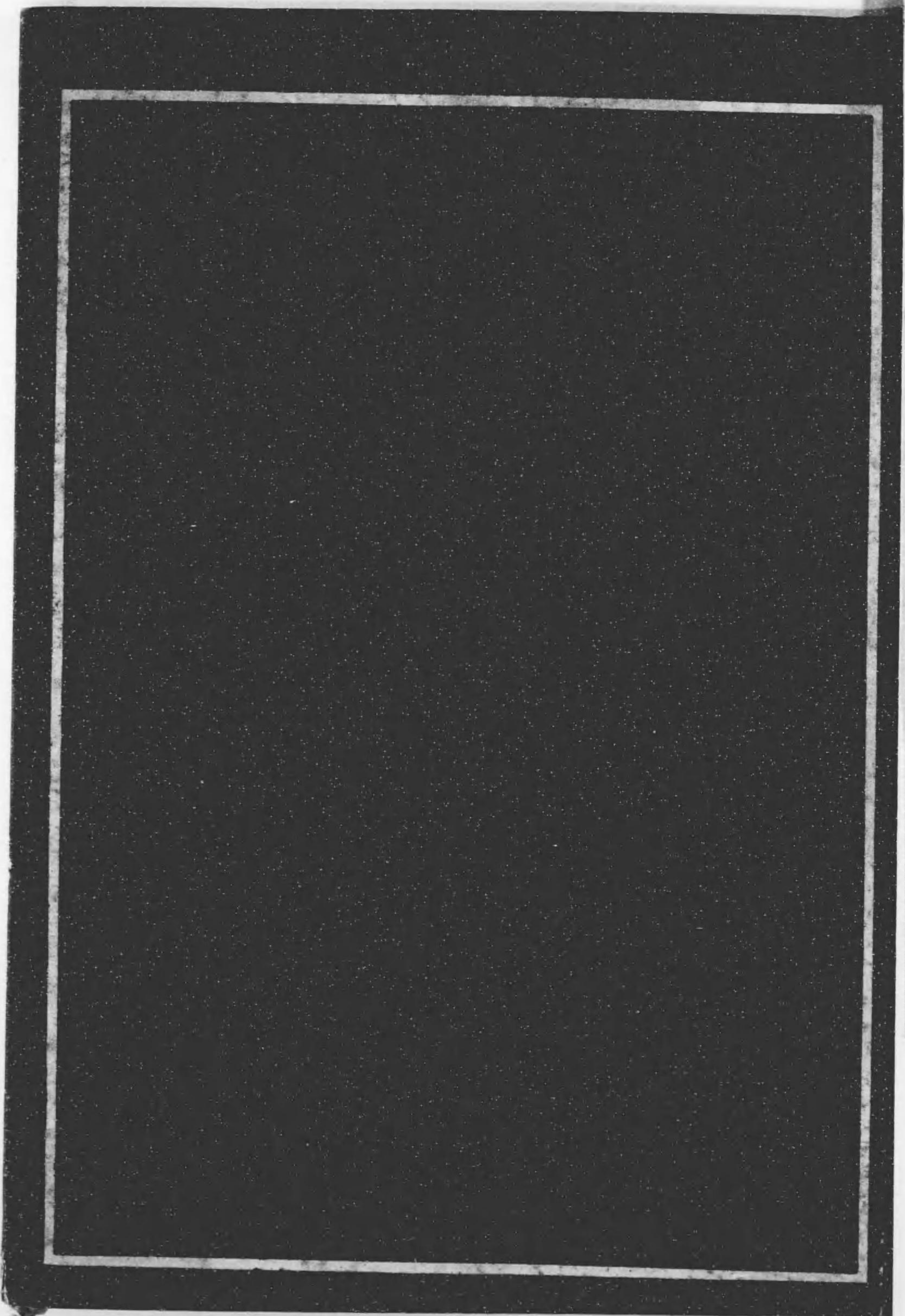


始



特 210
550

新 井 徹 詩 集
南 京 虫
1937



京 東
版 閣 泉 文



目次

第一部

死生のおひだ	三
化 農	六
南 京 虫	一〇
明 け が た	一四
貧 乏	一七
あ る 部 屋 で	二一
あ る 子 の 記 録	二四
勞 働 者 詩 人 に	三三
反 省	四七

第二部

詩人が歌はねばならぬとき……………三三

林のち……………三五

朝のうた……………五八

満月となつて輝き流れよ……………六一

南無妙法蓮華經……………六五

夕餐の卓で……………七一

民衆は求めてゆく……………七四

マムシがぶつばなたれてるぞ？……………七七

挨拶……………七九

第三部

泡盛のうた……………八四

琉球娘……………八八

女の……………九〇

心のかげ……………九三

言葉……………九五

蠅……………九七

廣告……………九九

めでたしめでたし……………一〇三

告別……………一〇五

僕の碑……………一〇七

第四部

算盤學校(詩劇)……………一一〇

跋……………一一八



部

死生のあひだ

眞直ぐに立つんだ！

力をこめてぐんとからだをもたげようとする
ぐたぐたにどこかしびれてゐる

上體が立ちあがらない

力をこめる こめると

ぐらぐらぐら

アスファルトの上をよろめく……

支へてくれる人はゐないか
ゐない

安全地帯につつたつた人はゐたやうだが

ゐるのかゐないのか 支へる者はない

今、おれたちの本をあづけてきたばかりの

すぐそこの本屋の人達も気づかないのだらうか

妻ははるか遠い一點だ

畜生！ ひきにげしやがつたか

おれはふつとばされた

ハッとしただけだ

おれは大丈夫なんか

よろよろよろしてるから

ある 命はある

眞直ぐに立つんだ！

眞直ぐに立つんだ！

何とかしてつりあひをとりたい

上體をすらつと立てたい

夜の街はぼうつとかすんでる

眼鏡はどこへぶつとんだ？

ほのぐらさの中に

しらじらとした十時過ぎの街路――

騒音はない

だが 荒海にゆれてる甲板だ

ゆらゆら ゆらめいて……

したゝり落ちる

手にふりかかる

血だな！

どこから？

何にしろ上の方だ

顔のあたりだ

………

もうおしまひだつたかも知れなかつたんだな

おれの一生つてやつあ

幕になる！

なんと造作のないことだ？

悔いはないか

ある

死にきれないぞ

いつ幕になつても

悔いなおれに

なりきつてゐたいな！

「大丈夫ですか 大丈夫ですか？」

走つてきて

よろめくおれを支へた男がある

化 膿

幾萬の瓦を渡つてくる風にひたひを拭き

二三分間を 河に見入るのだ

市設食堂の出張つたバルコン

ペコペコの腹もふくれた

此處に集り得るほどのものは幸福だ

河の面は沈んでゐる

くづをれる肉體から滲み出て

都市の膿がたたへられ

あちこち泡立つて

巨大な怪物はなほも膿をはき出し

腐れちぎれた肉片にくぎれのやうな

浮遊物のただよひ

静止してゐるやうで

鈍重に移つてゆく

すゝけ黒すんだ

ぬらぬらの流れを

漕ぎすゝむ舟

一人は櫓を押し一人は棹さし

力を合せて舟脚をのぼす

船べりの七輪にかけた薬罐は

ポツポツ……と湯氣をたててゐる……

橋の袂たもとに屯たむろしてゐる舟々を抜いて

彼方へ！

流れゆくものにそむいて立つ河岸かたしの交番

對岸の柵では賑やかな食卓を夢みるルンペン

橋をとどろかせて

電車はせつかちに河をまたげ

河の流れを知らない

風だけが病熱を吹きつける

南京虫

一九三五年 出世をした南京虫よ

お前は 貴族院議員法學博士の嚴肅な唇にまで這ひのぼつた

「兎ニ角數發アル紳士」の手記として朗讀される

「足一步部屋ニ踏ミ込ムト、スグ大小ノ南京虫ガゾロ／＼ト這ヒ寄リ

ソノ度毎ニ飛ビ上ル様ナ痛ミテ感ジ、一晚中南京蟲ト戰ツテ夜ヲ徹シ
マシク」

議員達は一樣に首をかしげる

一體 ヤモリの類であらうか

毛虫の類であらうか

恐るべきその正體は

議員と大臣の頭數だけの疑問符となる

本邦憲法學者の權威は最初からして怪しげな物語をした

「二疊半ノ不潔ナ留置場ニ八人同居セシメラレテ

其爲ニ健康ヲ害シ痼疾ノ肺結核が再發シ……」

講達は一樣に首をふりつゞけてきたのだ

「出駄羅目の手記を書いとるわい」

世界はあまりにかけ離れてゐる。

その夜も下界のある部屋々々では

十二、三人からの人間が脚を逆に

南京虫蒲團に突合せ

二疊半の夢にうなる

それはおれがはじめてのときだつた

夜中おれの爪は熊手となる

皮膚はあちらこちらもぞもぞといらだちむくれあがつた

夜明けの光を待つてシャツをひつくりかへす

縫目にそつてひそんでゐる白鬼め！
ぶつつぶすと おれの血が滲んだ
せめての快感である

併し 日に日が重なり

なんと空白の時間が長かつたらう

笑と舌と文字を封じられた世界――

そこでおれは発見した

お前らを決してぶつつぶさない男を

その男は用便で儉約した塵紙に

お前らを包んで置くんだった

壁のかげでこつそりひろげては

その競技場でランニングさせるのだ

お前らを同じスタートから……

その男の皮膚は決していらだちむくれあがらなかつた

もうなれつこの友達だつた

いやその男達の同志にまで戦士にまで
發展してしまつたんぢやないか

一九三五年 狼狽した貴族院議員は悲鳴をあげる！

火は足もとについできた

お前は久しく「教養ある紳士」にありつけなかつた

しかし、今や滋養ゆたかな沃野に脚をふみ入れた

「非常ナル苦心ヲ致シテ居リマスガ

驅除シ切レナイテ困ツテ居ル事實ガアルノデアリマス」

司法大臣。既に力及ばないと壇上で歎いてゐる。

明けがた

よくも シヤベクル奴だな

チイチーチイチー……

昨夜はわざわざ風呂敷を二枚もかぶせて置いたが
ほんのり白んでくるのを

こいつ勘で感じやがるんだな

もう眼をさましやがる

時計を探ぐつてみれば 相變らず四時半

校正から歸つてもぐりこんだのが二時

数日つぶしてるのに

ヒステリーめ!

毎朝 毎朝 起しやがる

六時半になりや つとめだ

いやでも應でも起きにやならぬ

眼をつむつて 考へるな…… 考へるな……

シーンと冴えかへつて

あたまは透きとほる 硝子玉だ!

弾力性のない脳味噌は

針になつてるらしいぞ

一分でも二分でも おれは餘計に休まにやならぬ

鹹くさにでもなつてみる

三原山問題だ おれの 親爺の お袋の……

彼女は 體温器はさんで寝てゐるし

がむしやらひげを剃りたいと思つたことは幾日か知ら

起きれば臺所で冷飯かきこんで

ぼろ靴つつかけつつかけ出かけにやなるまい

「逃がしちゃいなさいよ

そんなにやかましんなら……」

しかし鷓鴣め！おれが近づけば首をかしげやがる

餌ごまと一緒におれの指をつつきやがる

今晚は 玄關の下駄箱の上の隅つこに置いてやらう

いや 臺所の野菜籠と並べとかう

それとも床下にねじこんで置かうか

とにかく つとめから歸つたら

一束の原稿や手紙を片づけて

仲間の本の出来あがつてゆくおもひに

また 校正へとび出さんでは居られん俺なんだ

貧 乏

貧乏！ おまへはおれをしめつける

今夜もぢかに妻の言葉は胸を打つ

「どうしたのかしら、涙が出てしまった

にくらしくて……」

悲しいのではない、恥かしいのでもない

しめつけられて、身動きがなくなつて

ぶつつかつてゆくものの涙――

一人の家主が憎らしいのではない、拂へないのが悔しいのでもない

うんとおさへつけて、おれを

おれ達みんなを押し流さうとする

すばらしい家主のタバを操つてゐるやつ！

夜中の中から風は耳は氷りついでるし

神経の鈍つた全身を耳にして

涙を・憤怒を

おれは十二時過ぎに聴くのだ。

何處を歩き廻つても、何時見つめても

あらゆる空間にひろがり、あらゆる時間を侵してゆく

パチルス！

例へば、おれは弟を愛してゐる

.....

一杯の飯を興へ、一枚の銀貨を握らせることは

弟を半日でも一日でも生かす

.....

さうであるのに、弟がにこにこやつて来たとき

びつたりと合はせるにこにこが出来ない

「都合してくれない？」

それも遠慮しいしいふ弟の言葉が

今日もまた出るのではないかと思ふとき。

それが、気がねなくボンと投げ出せるんだつたら……

事態は反対だ！

ふさぎの蟲が胸をふさぐ

おれの顔は彫刻的になる。何といふ不幸だ！

肉親の愛情、同志の親密までも蟲ばみ

じめじめした蔭影を、社命全體に押擴げてゆく

おれ達の生活をしよつちう搔亂し

はきだめに突き落さうとする。

おれやおまへや 否々

世界百萬のおれ達おまへ達の力で……

その毒瓦斯に犯されながらも

しとめずに置かれぬものを知つてゐる

ある部屋で

六月の空にあをあをと伸びた櫛を時をり仰ぐ

「あれが紅葉するまでいいさ」

よく云ふ主任の言葉を浮べながら

鉛筆を動かしてゐると

鉛筆の穂先にほぐれてゆく年少時の繪卷――

女氣のかはいた隣の衣類商では

算盤玉と支那商人の饒舌とが轉げ廻つてゐたつけ

メリケン袋のつぎはぎ仕事着の父は立ちづくし

頬かむりして裾をはし折つた母と

鮮童チンガの繰出す麵類を裏庭に乾してゐた

狭い庭からパカチの這つた温突の屋根が幾つも重なつて見える
久しぶりで歸つた俺の爲に深い井戸には西瓜がぶら下つてゐる

今もなほ姉の語つたのを忘れることが出来ない「ほんとにね、あ
ちらにいつた初は明日の米をどうしようかと、空の米櫃をみて泣
いたことは何度だつたかしら——」

さう手記にしるすと、ぐんと胸がせつなく
うるんでくる目がしら

俺は手で顔を遮ぎる

紙がぼたりとにじむ

その時だつた 入口のドアの開いたのは

ふりむくとお義母さんだ

立ち上つてお辭儀をしても

かくせない涙

お義母さんもすつかり涙聲だ

「お義母さんです」と主任にいふ語もかすれ

咽喉がすつかりつまつてしまふ

で その部屋の一人は云つた

君も案外人間らしい所が残つてるね」

また も一人は云つた

「あれちや運動をやる資格はないなあ」

すつかりお義母さんとの三十日めの涙にされてしまつた

不覺の——不覺の涙！

しかし 何を恥ぢての涙であらう！

俺はその涙の中からたち上らされる

その涙の故にこそ……………

夏の雨に叩かれた緑の枝のやうに——

今更紅葉するまでほど遠い樺の梢をしみじみと見上げる

ある子の記録

「よう、先生註文してくれない？」
うつむき加減で

この子はとうとううつたへる
僕は知つてゐる

本屋にその本の取寄せられないわけではないといふことを
収入のないその家の家計簿を
もう十分過ぎるまで飲みこんでゐる

本屋はこの子の註文を受付けてはくれないんだ
僕は僕のガマロの中から銀貨をなげうつべきであらうか
「つけてみるさ、一體卒業までいくら引出してゆくか……」

さういつて借りてゆくまゝに與へてゐる
主事の先生の態度をとるべきであらうか
もしさうだつたらいつ貧乏の種はつきるんだ？
(お人好しは豚に食はれる！)

「ないわけではないさ」

その子にいい切つたもの

まだ割切れない自分の態度をどうしようもない

……すると丁度指定の本屋がやつてきた

「さあ、ぢかに頼みたまへ！」

「よう、先生頼んでよう……」

態度のあはれつぽさにひかれてゐると
僕のガマロはからつぽになる

「自分で頼むんだよ、自分で！」

體をくねらせながらその子はたのんだ

「おや、この子はまだだつたんだらうか」



といった顔で本屋はきいてゐる

たのめば早いものさ

翌日本屋は持つてくる

「お金は？」

「持つてきてないよ」

その子は主事の先生の机に近づく

「いくらなんだよ？」

またかと、併しいくらか事務的に、ガマ口はひらかれる

その子はいくらか微笑みながら本を受取つてかけてゆく

授業時間になると近寄つていふんだ

「先生、もう本が来たから、この次からあててもいよ」

それなのに僕は與へやうがなかつたんだ

主事の先生はいつもいふ

「思ひ切つて小僧に出せばいいんだらうが インテリは思ひ切れないんだね」

一體、限界性といふのはテコでも動かないやつだらうか

そいつは、とかく「宿命」といふ言葉で呼ばれ勝ちだが

しかし、人間てやつは

流があれば泳いで、巖があれば攀ちのぼつて

智慧者は橋を渡したり梯子を掛けたり

するい奴は船にこつそりしのびこんだり、人の脚にぶらさがつたり

何とか彼とかして生きてゆく道を求める――

といふ道理はこの子にだつてまさまさとあらはれる

單に學校だけのことではない

街頭の書棚にだつてあらはれる

あるとき、古本屋で僕は校印のある本を発見した

學校で探しに探してゐた、まされもないその本

「ふふん！」と鼻を鳴らしてその日は歸る

法律は正當だ――

盗品は以前の所有者に無償で歸る

故賣は古本屋をいためつける

泥坊は一體どこにゐるんだらう

どんなにこわい顔をした奴なんだらう

しかし、もしかそれが子供であつたとしたら

法律はあまりに棘キキの多い鞭だ

感化院は法律からどれだけ進歩してゐるか

……翌日はまた一年坊主が蒼ざめてゐる

六十何錢入のガマ口がパスもろとも行方不明になつたのだ

あれやこれやいろいろ話しあふ

主事の先生の顔面筋肉がびりつとびりつと電氣にふれてゐる

とにかく、放課後昨日の本屋に寄ると、てつきりあの子だ

本も買へないあの子だ

堂々と本名で賣り込んでゐる

「それにしちや餘り大膽すぎますね

學校から貰ふんだといつてましたよ

不審には思つたんですが……

自由に持出せるやうになつてゐるんですか」

「さう！自由に持出せます

しかし、事情は色々複雑してゐるでせう」

本を賣却値段で買戻す

帳面には何と度々やつてきたこの子の記録があるだらう

この子の亡いお父さんが残していつたと思はれる本

お母さんがこの子をいかに立派に育てあげようかとして讀んだと思はれ

る本

そして見つからなかつた學校の本の數々が書かれてゐる

今日のガマ口のひももまたこの子につながれてゐるのではないか

しかしあけつばなしのやり方はそれを否定する

どんな子供がどんな社會のやぶれ目を背負つてゐるか

聰明な教師だつてなかなか見破れるものぢやない

とにもかく、事實を主事の先生に報告する

それに基づいてその子と母親が呼び出され
主事の先生の前で悲劇が行はれる……
取調べはその子とガマ口とを引離した
いつだつたらう

例の林の道でとぼとぼと登校するその子と一緒にたつたつ

「何だ？元氣なささうぢやないか」

「うん、ごはんたべてないから」

「工合悪いんかね、お母さんは——」

「うん、いつだつて休んでるんだもの」

お父さんが亡くなつて幾年

朝起きあがるは、りも失つてしまつたお母さんなんだらうか

自分のために鶏を飼つたりなぞしたのもしくじつてしまつて

日曜学校の先生をしてるといふところ

その朝もお晝辨當を持つてはゐない

その子のしをれかへつてかしげた顔が

僕の心に焼きつけられてゐる

労働者詩人に

君の詩はまだ熟してゐない
りんとした眼を持つた若者だらう
十二時間労働の後にペンを握る
ごつい手で書いた「職場の歌」はすてきだつた
今に色づいてたまらぬ匂ひをぶんぶんふり撒くだらう
何ものをもうち超えて
偉大な労働者詩人になるだらう
新しい詩の世紀を翹望する！
だから僕はかなしいんだ
君の言葉に不消化なものが交るとき

君の眼が一方を見て他方を忘れてゐるとき
ブルジョア詩人がたわごとを云つたところで
一顧にも價ひしないが……
君達の抱いた少しの缺陷も
どんなにか僕の胸を痛めるだらう
僕は君の忠告を受取つた
「力強い労働者のリズム『アルメニアの兄弟へ』から
どうして『カバン』へ敗退したんだ？」と
僕は眞實淋しかつた
しかし敗退を認めて淋しいのではない
一九三二年の、あの詩人達
主題の積極性をまつしぐらに追求してゐた詩人たち
そこに憧憬れる感情！
まこと幾人かの正しい詩人がゐた
その中の何人かはまだ……つながれてゐる

君はそれらと一緒にまやかしものまでも鵜呑みにしてゐるんぢやないか

その日の輝やける詩人の一人は

秀才の某大學生であつた

伶俐な頭脳はすばやく指導理論を捉へた

まくしたてる議論の煙に捲かれて

たぢたぢしたもさ

彼は巧妙に積極的主題をとりあげた

理論から批難すべき何ものもなかつた

彼は忽ち組織の重要位置を占めていつた

ただ人々の胸にはうなづけない物足りなさが残された

用捨なく時は流れる！

彼は、卒業した

就職した

そしてプロ文學から立去つてしまつた

カフェーからカフェーへ泳ぎ廻つてるといふ噂だけがひろがつた

一つの謎がほぐれていつたんだ

僕は『アルメニアの兄弟へ』の乏しい體臭に顔をしかめた

馬車馬式の活動の中から生れたリズムよ

僕の足は地につきかねた

僕の職業は詩からとり残されてゐた

景氣のよさうな仇花の數々に

今更さびしかつた

輪は小さくとも、全生活から

つやのある匂ひの高い花を開かせたい

まぎれもない肉體の詩を……

僕は『ある部屋で』を書いた『死生の間』を書いた『カバン』を書いた

詩は僕の忘れられた面からも芽吹きだしてくる！

南海の労働者詩人よ

囚はれの詩人榎村浩を繼ぐ若い詩人よ

インテリゲンチヤ詩人のヂクザクな

その歩みの眞實の進展と敗退を
月の智慧と太陽の愛で——と
僕は君の若々しい肩を叩きたい
未來の藝術を高く荷負ふべきその肩を……

反 省

あまりに安易な言葉を綴らなかつたか
言葉は責任を問ひかける
僕は頭を垂れる
自分のことだけ考へて
自分以外のことを簡単に片づけてゐたのではないか
自己の心理には血眼になり
他の心理は公式的に片づけてゐたのではないか
救ひがたい詩人の怠慢よ
藝術家は自らを解剖する愛と敵意を
他の何ものに對しても抱かねばならない

自分がこの世に生きる生き方の正當性を主張する

懸命の表現を惜まないで

他を數行に片づけて

劍もほろろにつき離してはゐないか

例へば「彼は没落した」といふ一語は

よく彼を究明し盡した藝術であり得るか

おお 愚問はよせ

僕は數行の詩句に反省の幾時を奪はれたであらう

カフェーの中に溺れていつた

プロレタリア詩人を足蹴にした言葉――

彼には彼としての必然性

社會が與へるあらゆるいさし緊縛と

その中からまれてゆく生理的なもの

それらのこんがらがりのあがきで

彼が酒氣と魅惑に何ものを拂はうとしたか

その眞實の推移をよく歌ひ得たなら

僕は彼を責めることは出来なかつたかも知れない

ただ其處には嚴然たる現實が突立つてゐる

無限の言葉を沈黙する現實よ

それに立向ふ時

わが身のまはり

スポットライトの落ちるところだけに

限られた近視の詩人――

僕は僕の眼をかなしみ

しかしスポットライトの外までも見透す

偉大の藝術を思念して

眼を擧げる

それは

わが怠慢の詩句に

もてあそばれたすべてへ

第二部

誰ひを求め眼でもめる

詩人がうたはねばならぬ

とき

突然闇を貫いてきた

僕の瞳はハッキリと見開かれる

硝子をすかして蒼くろい空が深い

夢の中であつたか

棺のゆらぐ音もない

猫の足音一つ聞えぬ

石のやうに固くなつた

全身にポーン……と第二音がひびく

遠い 遠い

電信隊より遠い

戸山ヶ原であらうか

市内警備の兵士であらうか

東京の空を一筋に響いてくる音

どんな肉體でもすぼりと

穴あけて行くであらう

新しい記憶はつばさをひろげる

折から 俄に起る地響き

おもひきり大氣をぶつつからせながら

ぐわうぐわうとゆく

築地の舞臺をおもひ出す

軍人が満載された客車

幻のやうに音は遠のく

僕は耳を傾けつゞける

沈黙の底に 幾つも幾つも

眠らない瞳が光つてゐるのではないか

銃剣の先は闇をつきさしてゐるだらう

くづをれゆくもの たちあがるもの すれあふものよ

僕は空しく腕を組んでゐる

机の紙にすぐさま筆を下せない

深夜に目ざめて

詩人がうたはねばならぬとき

第三發！

神経はびり／＼と痙攣する

不安に眠り切れず

寝あせでもかいてゐるのであらうか

銃聲はそのものゝうめきを傳へながら

後はまた ぶきみな静寂に陥つてしまふ

林の中

すり鉢のやうな盆地

そこにうづくまつた

伐りひらかれた林の底に

滯まつた空氣がよどんでゐる

柔かい風は頭をなぶつてゆく

地面には杉や櫟の枯葉が落ちてゐる

半ば土になりかけた朽葉の堆積

ころころころがつてゐるとちの實かしの實

はじけてくさりかけてゐる殻

中實は厚ぼつたい二枚の葉となり

小さい根を土に下す

ハコベラや螢草や名を知らぬ草が樺色の陰から萌えてゐる

ブーンと微かな音をうねらせて蜜蜂がひとまはりしていつた

黒蟻が地べたをはつてゆく

赤黄ろい腹をもつた羽蟻のやうな虫がさつきから何かをかき廻つてゐる

チュチーク チュチーク 上の方から聲が落ちてくる

仰ぐと、空は乳色を帯んではれ渡り

とがった濃い松の葉や、萌黄の櫟が見えるばかり

そのままであると、大きいトンボが飛んだとおもつた

すると、今度は、向うの高い松の梢で

チュチーク チュチーク……

チエツ！ 舌打しながら見てゐると

ブルンブルン翅をばやけたやうに廻しながら飛んでいつた

雀よりやせぎすな小鳥だった

何處かで地虫でも鳴いてゐるのか

何となく耳鳴りでもするやうだ

足許に日光をあびてゐる朽葉色のいもむしを

木のきれはしでつつくと

びくびく動く

林を越えて、建築の、板を叩く音がする

ギーター ギーター

タータツタータツ……

工場の機械がひびいてくる

號令が聞える

さらに遠くから喇叭が鳴る

犬も鳴いてやがる！

朝のうた

太陽は黄ろいマントで包んだ

なまなましい枝の傷痕を

散々なやみ抜いた草々のみだれを

天からの通信のやうに

遠く 遠く 電線がゆれる

はるか熱帯から なだれて来た

颱風よ 豪雨よ

お前は現実の日本を洗ひさらした

風速三十五メートル!

演習し続ける帝國海軍の胴體を衝いた

駆逐艦「夕霧」初雪」損傷・六十三名死傷

あちらこちらで、仲間も斃れた

日立鑛山で崖くづれ 坑夫死骸三十一

農夫は稲にしがみつきながら流された

あの嵐の中をどうして

すつぽり抜けだしてきたのだらう

電線に羽ばたいてゐる雀らよ

チチ チツチ チチ チツチ――

身輕に 朝の唄うたふ

はばたく羽根のあひまをくぐり

胸毛の白をそよがせながら

微風は深い深い蒼穹に挨拶してすぎる。

満月となつて輝き流れよ

草の花々にほふ青絨氈を敷け

闇底にさむざむとひろげられた

雪河原は無気味な沈黙にある

まんまんたる満月となつて輝き流れよ

雲間にかすかな月のかけらは

ほのかな尾を河にひく

工場の窓といふ窓よ

灯の吐息を闇にむかつて吐き

あるひは空をたたくやうに

あるひは地をひきずるやうに

機械は胸にひびいてくる

夜天をささへる煙突は幾本

あふれたなびく煙は雲間につゞき

大空を雲はひきさいて

蒼い旗の星々はふるへてゐる

吹きさらしの長い橋の上

わが追憶のおもひもちぎれさう

彼方の底なしの蒼にながれた

釣竿の先にかかる工場の空がみごとだつた

は・や・を釣る群にまじりながら

黄のあざやかさに眼をみはつた河岸

煙ともおもへぬあの黄色さは

いま、闇にかくされてゐる

かつてこゝろを燃やした文學……………

ある者は

ある者は

しかし、三百六十五日瓶を洗ふ労働者は

持場以外の仕事を知らない

そこには規律と訓練と秘密がきびしかつた

まだまだ……………

時代の闇に吞まれてしまつた

その間、荒川べりの貨物船よ

おまへは一日といへども休んだらうか

以前われわれが凝視めたおまへ達は

たゆたふ流れに今宵も静かにつながれてゐる

おまへはどこへ工場を結びつけるだらう

肥料を求め得ず

農村はいよいよ痩せがれてゆくのに

全国のはしばしにふえてゆく同類の肥料會社

あれから、さらにくるぐると
タンクのきそひたつた壁かけ
何處の雲を射ようとするのであらうか
はるか東京灣から放たれる
サーチライトの光芒をふりかへりながら
そこを通つてゆくと
咽をふさぐやうな臭ひはまたも襲うてくる

南無妙法蓮華經

ド Rond ツド ツド Rond ツド ツ
ド Rond ツド ツド Rond ツド ツ……
その音の正體をきはめたいと
林にはいつていつた
色ざめた曇り風にさわさわと
櫻の若葉は今日の淋しさをかこちあつてゐる
地面には白つぼい葉つばの草が薄紫の花をつけてゐる
いつの日にこゝに温かい人のさゝやきがこもつたであらうか
半分青いかびをふいた蜜柑の皮が
さらけた新聞紙の上に憂鬱を味はつてゐる

甘にがいチョコレートの紙もちらばつて

僕は、多くの人が林に棄てたであらう愛をおもつた

ド Rond ツド ツド Rond ツド ツ

ド Rond ツド ツド Rond ツド ツ……

空がカキツときりひらかれたとおもふと

丘の上に出た——

白い花をつけ

無造作に土につきさされた柴によりそつた豌豆よ

丘の下まで毛槍を並べたてた大麥の大群

麥のあひま／＼の白い覆ひのかげに芽生えてゐるのは

やがて畑を占領しようとする西瓜か南瓜であらうか

丘の中腹にリヤカーをひきあげ

頬被りの女房と

男は吠なえずから肥料を畝間にばらまいてゐる

紺くろがすりとお下げの娘が二人

しきりに菜の花を折つてゐる

青々とした丘の裾に流れた

黄ろさにまみれて

ド Rond ツド ツド Rond ツド ツ

ド Rond ツド ツド Rond ツド ツ……

林のへりの小徑をたどつて

田圃のふちに立つ

タンポポよスマイレよレンゲよ

自然の散華さんげは野に暮をはる

誕生會なまに、花でおほはれる小さなお釋迦さんをおもふ

お寺でもらつた甘茶が舌によみがへる

あぜ道はぶく／＼

草々のみどりを噴き出す

流れは水草をなびかせ

水すましやげんごろうや蛙の脚をのびのびとひたしながら

大地をうるほしてゆく

ド Rond ツド ツド Rond ツド ツ

ド Rond ツド ツド Rond ツド ツ……

生きたプロペラをブルンブルンとさせ

腹と背をリズムカルにひるがへし

大気を波状線に切つて

小鳥の群は越える

野を 樹立を

丘を

その丘にはまた傾斜した畑がひろがり

男と女が鋤をにぎり種をまいてゐる

サツマ芋のやうな子供が

脚元にころころしながら

そしてその丘の上

村の衆を見下し

白い法衣が軒先にブラリと垂れ

日中とちこもつてわめきながら

太鼓を叩くの仕事をしてゐる人々がゐた！

ド Rond ツド ツド Rond ツド ツ

ド Rond ツド ツド Rond ツド ツ……

掌には田畑の汗よりバチの汗

あゝこの門口の一札ぞ

南無妙法蓮華經！

夕餐の卓で

—上山草人歸朝の日—

ホーレン草をたべてみたまへ

静脈がむくむくふくれあがつてくるよ

だから、今宵も女房は食卓にのぼせる

郊外の小川から摘んできた芹せりにまぜて—

ぶんぶんふりまく野の匂ひに

夕刊をひろげ

新しいインクの滲にじんだ話題をひろふ

一日中ひとりぼつちでゐた女房は

このひとときを毬たまごのやうにはすんでくる

疲労に、ぐつたりと

おしだまつてゐる僕をもどかしがり

淋しみしさうな表情をし

たまたま、十數行の記事が

僕をとらへる

女房をとらへる

「ねえ、ソヴェートも

汚きたないものばかり

着てるんならつまらないわ」

一枚のアツバツバを買ふにすら

何度か足をはこぶ女房をおもひながら—

「でも、帝政ロシアの頃は

ずつとずつとひどかつたといふんだし……」

「だつて、日本は

こんなんより

もつといいでしょ？」

「さう、一部はだよ」

上山草人だつて、銀座は詳しくても

別な世界には盲だらうし……」

「ひよつとすると、美の標準がちがふんかも知れない

グラフ見たつて

女工さんなぞ、随分

さつぱりしてきてると思つてたのよ」

女房はホーレン草にグラフをかみあはせる

尤も、よいものづくめではあり得ないだらう

生活の汚點も残つてゐるだらう

しかし汚點は昔の汚點とはちがつた意味をもつて

存在してきてるのではあるまいか

「目標がねえ

ガラリと變つてきてるんぢやないか

衣服への慾望なんぞ

第二、五ヶ年計畫の缺で未練なく切つて棄て

新しい慾望が、つばさを

ひろげていつてるんぢやないだらうか

音楽へ 演劇へ 圖書館へ！」

「だつて、缺だつて

さうさつぱりするもんぢやないとおもふわ

いくら、なんだつて

衣食住は無視出来ないでせう……」

僕は思念おもひにおちいる

遠いけはしい道についで——

徐々にひらいてゆく心の花を感じる

成層圏を突抜けてゆく道について——

民衆は求めてゆく

土囊が積まれ、崩れてゐる

鐵條網がからめ片寄せてある

僕らは

あるいた

雪に轍を嚙ませて並んでゐる砲車

緒黒い顔の青年兵士が突立ち

あるひは車上に腰をおろしてゐる

もう民衆は近づいて何やら話してゐる

僕らも兵士と手を握りたかつた

胸のときめきを抑へながら近づいた

兵士達は言葉少なく



暮れゆく冬の森や空へ目玉をむけてゐた

岸邊の柳の枝はうすぐらく

濛水はさむい光を照りかへしてゐる

向うの大きい建物に灯がきらめき出す

もつと外のことをききたい氣持でゐながら

「この砲は何といふのですか」

「普通、大隊砲といふんです」

ほゝえみながら、兵士は簡潔に答へた

トラックが置き去りにされてゐる

濛端を迂廻して下つていつた

ざくざくと靴はどうかすると雪にめりこまうとした

装甲自動車は怪しげにはらばつてゐる

二間ばかり離れて兵士達が固まつてゐた

マッチを擦つて煙草に火をつけてゐる

.....考へてゐないかのやうだ
引あげ命令はいつ来るのだらう
若者らしい笑ひで肩を叩きながら話しあつてゐる
みんなは取りまいて會話に耳を傾けた
民衆は何かを掴みたい意欲で動いていつた
更に坂をのぼつてゆく
又銃が幾列かつづいてゐる
兵士達は焚火をかこんでゐる
「今何時だらう？」とある兵士がきいた
時計を見て、僕は答へようとした
「誰だ？ やつて來ては駄目だッ！」
銃劍がキラキラと夕暗にゆれる
民衆の波はすこ／＼坂を下り流れて行つた

マムシがぶつばなれてるぞ！

マムシ十五本ぶつばなつ
帝都の眞ん中、日比谷公園
世界に轟いた.....もさすが狼狽
.....と園丁びくびく蚤取まなこ
何しろ時も時ハリキツトル彼奴等
どこからどう現れるか分つたもんぢやない
勢ひこんだが一匹も見つからぬ
贋物はつかまへつけてるが
本物は仲々つかまへかねる
抜本塞源が現内閣の標語とやら

猛毒マムシの生態は？作用は？潜伏地帯は？
議會に諮問案提出するもよい
だがむじな同志は同じ穴に棲む
マムシの子息には親爺が偉く見えるばかりさ
また勇敢な……でも
ねらひを誤つては何にもならぬ
といつてもマムシ潜行の帝都です日本です
何はともあれ當面の重要課題！
すばらしい諷刺家があらはれた
作品等まどろこしいといふんだろ

挨拶

——大江河雄歡迎のタレ——

此處に皿がならびました
これ以上の皿をならべることは
時計の時針が秒針にとかへられない以上
今のわれ／＼に仲々困難です
しかし、諸君
われ／＼の背景には
稗と草の根の農村風景があります
缺食兒童のかけもうつてゐます
今晚の食卓も

あへて豪華な饗宴に見えるではありませんか
いや、今晚の主賓

カルル爺さんの手風琴クンはキットさういふ風に
プロレタリアの眼を以て

われ／＼の志を受取つてくれるでせう

カルル爺さんの、いや大阪の手風琴といつた方がいいかも知れない
しかしもう大阪でもないのです

東京の手風琴として

天下の飢えたプロレタリアのために

甘美な乳を無限にしたゝらせようとして

こゝに腰を落ちつけた

科學的な

われ／＼の機械の詩人のために

歓迎の席をつらねた

赤まゝの花を歌はぬ詩人

サンチヨ村の村長

裏街のペガサス

荒川の詩人

グラインダー

その他、若々しい

時代の乳しぼりである

詩人諸君よ

どうか、ありつたけの氣焔をぶちまけて

それこそは、どんなブルジョアの

饗宴にも劣らぬ

言葉と精神の豊かな饗宴を

祝はうではありませんか

實質的な詩の論議もいいでせう

あるひは立つて詩を朗讀して下さい

歓迎の定義にこだはらないで

第三部

それこそ

眞實に

われ人の手風琴タンを迎へる所以でせう。

泡盛のうた

ああ酔うた酔うた

さよなら！泡盛階級のすばらしい夢をはらんでやがる酒壺よ
ぐつぐつ煮えるおでんの鍋の側
おまへはもう素的にお腹をふくらましてる

さよなら！先生

ひよつこりやつてくれれば

深い深い顔の皺をのんびりさせて

今晚も間違ひなく鎮座していらつしやるマントの先生

先生はおつしやる

「よう！また来たまへ

泡盛は人間を純粹にするよ！

さよなら！ねぢ鉢巻の主人公

今夜も鱈汁に蜜柑、香の物

臺皿のあふれまで飲みほして金十銭

一杯半もあれば誰のはらわただつて純粹に洗はうといふわけ

法外におれ達を宇頂天にしてくれるきみの顔が

見たくなるのも自然のことさ

さよなら！入營前後の兄さん

職工さんだらうか奉公人だらうか

それはどうでも

あなたの唄はすてきだつた

胸がすつきりすきとほつた

さよなら！半纏着の職人さん

ほほう 元氣だね

「きみあんまり長えぞ

歸らんか おい歸らう 歸らう」

まああんまり向う見ずはよし給へ

「酒がうまくねえ」としかめつづらが並ぶぢやねえか

さよなら！握手だ車掌君

きみはガツチリした労働者だ

きみはいい友達を持つてゐるね

友達はさつきからここに新聞を見てゐる

三日さぼつてたきみをたづねてきてくれたんだつて

きみも怠けたんぢや顔向けできまい

「これでも後指さされることはしねえ

友達は模範車掌だ

おれだつて一回も豫備検くつたことはないよー」

あつははッ！ははッ！よく分つた

きみはあんまり善良すぎる

善良で大手がふれりや

繩のれんくぐるにも及ぶまい

世の中は苦くいから泡盛屋も繁昌はんしょうするさ

いやいやこれもきみよりは時勢だらう

さよなら！ 満堂の諸君

此處は極樂純粹郷

一步出ればこの世の地獄

ああ 酔うた酔うた

琉球娘

僕は、若い身空で
パンのため琉球に渡つていつた青年を知つてゐる
俊寛のさびしい想ひがはりきつた胸に棲食ひ
いつしか蛇味線の音になやみをかきたてながら
やさしい島の娘を抱きしめて
人生の野心を忘れた青年を識つてゐる
青年がさらに胸を灼いたであらう、この泡盛
僕は南の國の錦繪を
惣之助張りに胸一杯にひろげ
鋭い刺戟に血を燃しながら

こゝにも熟れてゐる頬をながめいる
どんな南國の果實の色艶もかなひはしまい
焦茶色にほつかりと浮んだもれあがり
微笑は茅の葉の先より細い眼尻にきれて
ひとみは涼しく走る
聲はまた遠く聴くがよい
梯梧の花かけにうちふる月の鈴か
僕は琉球娘をこゝに聴く
娘よ 娘よ
おまえらは島でかせいで稼ぎきれず
泡盛の壺と共に日本の都に渡つてきて
一杯十銭の洋杯カッパで
ぐたぐたの労働者の五體や
どんよりとしたインテリの胸に
あつい熱いおもひを注ぎこむ

女

—森田たまのな—

絲を吐く肉體は白くすきとほつてゐる
遠いかすみの國の香木のやうにほつてゐる
絲はなよなよと光るのである
風に消えるやうに蒼空そらにあがる
目に見えない網となつてそつと襲うてくる
心臓がしびれて恍惚となる
めんめんたる絲よ
僕は絲にまかれたさなきとなる
なんといふ楕圓形の夢であらう
僕はもうこんこんと眠るの外はないのである

戦ふべき敵なぞ意識しなくなるのである
茫々たる中に聲が降つてくる
肉體より衣装である！
華やかなおもひよ！
衣装を外にして女の生命はない！
あやしげな呪文に愕然とする
むしやぶりたつのである
愛すべき妖怪をハツシときりつける
肢體は五彩の花火と散るのである
散つても消えはせぬのである
蛇のやうにうねる髮束かみたば
何かの秘密を聴いてゐる貝の耳
この胴體からはミンフの唄がひびきでるだらう
歌麿が描き忘れたふくらはぎ
どれもこれもきれぎれに生きてゐる

きれぎれがクツクツと忍び笑ふ
おのれ！と睨めば
いつしか部分は全體に綜合されてゐる
附焼又はだめ！だめ！と
噴笑しつづけるのである

心のかけ

あなたの寝言が氣にかゝる

夢の中で誰と話してゐるんだらう

僕はわざと聞いてみる

あなたは不用意に

夢の世界から

現實の僕に答へるかも知れない

そしたらあなたの心のかげの

秘密までのどけるぢやないかしら

あなたの夢のすみすみまで

僕のものにしくちやおかれたい

言

葉

さういふ言葉を

無造作につかひすぎる

われわれはつかひすぎて来た

そしてある人々を痲痺症にしてしまった

そしてある人々の眼をむやみに角だたせた

浪費よ呪はれてあれ

僕等はまだそれを口にすまい

するときは

あけの明星の一点として

射とめよう！

蠅

ささやかな唄をくちずさみながら

曲線を描いてゐる蠅の群

シャンデリアの光に輪舞しながら

翅をひかせて

ここを常夏の國と生命をゆだねてゐる

窓外にはためく冬の風を知らぬげに

サモワルはほのかに湯気をたゞよはせ

珈琲の香は常にその觸覺を香らせるであらう

針葉樹の鉢の上に

ブラジルの夢は立ちのぼる……

お前達は識らない
こゝに腰を下す人々が
どんなにいためつけられ
せんまいのゆるみに一瞬の刺戟を與へようとして
銀貨一枚を擲つのであるかといふことを
硝子戸の中に生れ
硝子戸の中に死んでゆく
お前達の幸福さをおもひながら
おれはたのしくさびしくなつた

(フランドロロフ)

アド・バルーン 告 球

大氣のゆれるがまゝに
ぼうつと靄をながし
あるひは西に あるひは東に
ふうはり ふうはり
氣まぐれなアド・バルーンよ
バルーンの下を
坂から、列が打ちつゞいてくる
先頭の陽に先る樂器が
アカブカと音楽をひびかせながら
めあてのないやうな足どりで

たゞ列に従つて歩いてくるみんな

一部の人々の口は歌つてゐるが

歌は全部にひろまらない

ガヤ／＼話してゆく人々もあれば

むつつりおしだまつてゆく人々もゐるし

何のことはなしにセカセカ歩いてる人々もゐる

一様の小倉服の下から菜ツバ服がのぞいてるかと思へば

背廣ものぞいてゐる

だらうか

霜降りが生々しい匂をふりまいてゆく

ひらく／＼と「労働報國」の四字をひるがへしてゐる旗よ

列はうね／＼と歌聲も低く

どこへ流れてゆかうとする？

ふと見る九段郵便局の立看板に

「……………御來朝記念切手發賣」の紙が

半分ペラペラはためいてゐる

春四月、今日は！

局の屋根には日の丸が流れ

ああバルーンだ アド・バルーンだ

空にアド・バルーンの泳ぐ春——

九段の坂はまだ／＼列をくりだしてやまない

めでたし めでたし

何といふ世代であらうか

みながみな死の方法について

おもひまどうてゐる

三原山はあまりに常套的になつた

ある青年はかう云つてよこす

トデモ イイカラ

ハヤク

ヤツテクレナイカナ

スルコトワ …………… ヨホド

キガキイテ イル

人々を勇氣づげる太鼓は鳴りをしづめた

網望の谷にあがいて

何でも彼でもいいのだ

せめても劇的な死が欲しいのだ

しかし に行き得るものも

一まで持ちこたへられない

「修養のゆきづまり！」が

ピストルを咽喉のどに擬してくる

自決！

ある學生の眼には黒い幕が垂れた

後といふもの

めつきり暗くなつた

すつぽり抜けだしたい

にでも行きたいといふ

そこでどれだけのものを償おがなひ得るか

それは問題でない

たゞ もう 現實が堪へきれぬ
あゝ かう なつては おしまひだ
天国へ 地獄へ……………
めいめい勝手に出掛けたまへ
カラツボになるだらうよ
さだめし
めでたしめでたしに收まるだらうさ

告 別

南無阿彌陀佛もアメンも御免だ
……………神づまいますも眞平
僕は天上天下無神論者さ
ありきたりの儀禮は抜きにして
僕には僕にふさはしい告別式をやつてくれ
寢棺は常盤木の葉ツバで埋めてくれ
やつぱり潤葉樹が氣持いいな
香はくゆらしても鐘を叩くのはよしてくれ
詩人のたむける歌なら大いにやつてくれ
僕の詩を読んでくれる人があつてもよい

僕の生涯の断片を語ってくれるものといはない
しかし女々しい追憶はよしてくれ
未来のよき糧とする意味に於て
發展的にとりあげてくれ
さういふ意義がなかつたら
無言の式でもかまはない
また喧々囂々の議論をおつばじめて貰つたつて
僕は本望だ
もうそれだけで僕は一片の骨となる
位牌なんていふものは無用の長物だ
好きな人だけが寫眞を掛けてくれ

僕の碑

僕は來世を信じない
死が見舞へば僕の一生はもうおしまひだ
しかし僕は矢張り僕の墓のことを考へる
あの櫛しきみの蔭で
わけも分らぬお經を聞くのはもう澤山だ
僕は僕の先祖諸公と別れてよい
どこか海の見える丘に埋めてくれ
ふるさとなら遠見とほみのやうなところがよいな
はるか沖の島から驅けてくる
碧い奔馬は白い齒をむいて

丘の裾をかむ

ふさふさたてがみは太陽にかじやきなびくだらう

丘の上にはいつも松が鳴つてゐる

そこに自然石を立てて

僕の詩の句をきさんでくれ

僕の詩の句はいつも鹽つぼい味がするだらう

誰もそこにやつて来ず

裏に埋れて虫の音がとりまくだけでもかまはない

若しも妻の碑ともふくそこに埋もれて

あの玄海洋の小さい島に

何人かの労働者が訪れて

僕らの碑を撫でてくれるんだつたら

もう満足だ

第四部

算盤學校

第一場

(男兒A・B・C 女兒A・B、小學卒業前後の子供等、それ／＼算盤を、手にふりながら、又小脇にさしはさみながら出て来る。右手から左手へ——。)

男兒B いそがう、いそがう、
おいらの組がはじまるぞ。

女兒A おくれちやよい席とれないよ、

チヨコ／＼ちびどもがはいつてくるし、

昨夕は入口のそばで球をはじきそこねたよ。

男兒C はぢきそこねはいつものことだい、

やあく／＼おはねさんの間違ひだらけ。

女兒B まあ悪たれ小僧、

二二天作覺えもせぬくせに、

男兒C 何だ、覺えたぞ、

槍でも鐵砲玉でも何でも來い。

女兒A ひい——えらさうに、

口はばつたい。

男兒A うん、貴様ほんとうか、

偉いぞ、云つてみる。

男兒C いゝか、二二天作ノ五 二進が一進 三一什ノ一 三三六什ノ二
三進が一進。

男兒B うまいぞ、うまいぞ、

四二二什ノ二 四二天作ノ五。

女兒B するいわ、するいわ、

外の人云つこなし!

女兒A さうよ、さうよ

ひとりだけ。

男兒C わかつてらあ、

四二天作ノ五 四三七什ノ二 四進が一進 五一天作……

女兒B ようく〜五一天作あ抜作よ、

五一加一 五二加二ぢやない。

女兒A けふもまた、

赤恥か、泣きべそか。

男兒A 生意氣いふな、

(歌ふやうに)

ゆきはよ〜

かへりはこはい。

男兒B (前に調子をつづけて)

工場の塀から、

ぬつと出る。

女兒B 何が出るのさ。

男兒B (歌ふ調子で)

茶葉服の怨靈か、

でつかい拳骨か。

女兒A あれ、ぼん〜……

時計が鳴つてるわ。

男兒A 走らうよ、遅れちや大變

目玉が飛ぶぞ!

男兒女兒の群走り去ると、間もなく左手から女二人(いづれも労働者のおかみさん風)買物に出掛ける様子で出てくる。右手から一人の青

年登場。

女一 うつかりしてたら、

餓鬼共の洗濯物が山のやう、

一日中きりく舞ひ、

今から晩支度さ。

女二 うちね、ちやんと、

早仕舞したんだが、

親爺がさ、晩酌が足りねえていふんだよ。

シヤクだしね、勝手にしやがれさ。

女一 また、例の摺みあひかね。

およしよ、みつともない。

親爺だつて、つらからうさ。

女二 殘業々々ちやねえ、

それや察しもしなければど、

割増がどつさりあるわけぢやなし、

だから、今日はいくさにならんうち徳利抱いて出て来たさ。

女一 全く、再々の市場通ひは、

女房のつらさ、

お砂糖は二錢あがるし、

五錢玉で野菜はちよつびりさ。

女二 うちの親爺つたらね、

今に大衆課税とやらがあるさうな、

高くならねえうちに飲んどかにや、

飲まうに飲めねえ御時世が来るか知れねえていふんだよ。」

女一 ハハツ、うまいこといふわね、

可愛いもんさ、

なんだかんだとみんなが酒の種。

女二 酔つて管まきや、

工場の疲れも忘れようと、

つい同情しちやうのよ、

駄目ね、女つて……

青年 一寸おたづねしますが、

あの、あの算盤隊は何です？

どこへゆくんですか。

女一 何ですつて、算盤隊とは？

青年 あれ、あれです、

算盤もつてゆくでせう、

がや／＼男の兒や女の兒や……

女一 あ、あんた、

夜學ぢやない？

女一 さう／＼、あれはね、

この先の算盤學校に出かけるのさ。

青年 どういふ先生が教へてるんですか。

女一 金井さんとこの番頭さんさ。

學校といつても塾のやうなもんですがね、

金井さんの貸家なんですよ。

女一 仲々感心なもんだわね、

もう何十年かあゝやつて教へてるんでせう。

女一 橋の向うからも、巢鴨や駒込邊からも、

大勢押しかけてくるんですよ。

青年 そんなに大勢やつてくるんですか。

どの位の人数を一緒に教へてるんですか。

女一 (女二をかへりみながら) ねえ、四百ぐらゐは居るわね、

幾組かに分けて一時間づゝ、

先生は一人でぶつ通し。

女二 何しろ、偉いもんですよ、

月謝はなし、御禮を包んでいつてもてんで受取らないんですつて。

青年 ほう、偉い先生ですね。

女一 何でも去年だつたか、

お上から表彰されて、

莫大なお金かさがつたさうですよ。

青年 一體その金井さんといふと、

何が商賣なんですか。

女一 まあ金井さん知らないの、

金井さんたらこの界限誰知らない人もない、

その工場の品物から何から、

一切の運送をやつてゐる運送屋さんさ。

女二 それやもう有名な運送屋さん、

何しろ犬にくはせる肉代だけでも、

わたしらの目が廻るほどださうですよ、

えらい犬すきでね、

テリヤだのシェパードだのブルだのドッグだの何だの彼だの……

青年 やあ、どうもありかたう。

第二場

(算盤學校。簡単な狭い机と腰掛の列。黒板の中央には大算盤が掛けられ、兩側には夫々「正しく強く」「勤勉は成功の基」と書いた半紙が貼られてゐる。その前に前額部の禿げあがつた番頭さん——先生が立つてゐる。詰襟の上衣を黒板の側にかけて、シャツとズボン姿。男女の子供等大勢。加算の蓄音器をかけながら……)

先生 今の答は、十二萬三千六百七十八圓五十六錢也。

兒童一同 御明算!

(再び蓄音機加算のつゞき)

先生 今の答は百六十五萬四千六百七十二圓四十八錢也。

兒童一同 御明算!

(この時蓄音機終る。猶右金額は變更してもよい。但しなるべく高額のこと。)

一きりついて、一同ガヤ／＼蜂の巣をつついたやう。)

男児C おい、早く浪花節ききたいな。

男児H また赤垣源藏徳利の別れかい。

男児I なんだ、おらあ丹下左膳だ。

さあ、来い!

(眞似をして隣席の男児に斬りつける。)

男児J あつ、何だ、

生意氣千萬。

(斬りかへす眞似、遂に取組合ふ。)

先生 さあ、みんな静かに／＼、

次は割算だ、

割算がすんだら「詩吟」をかけるぞ、

静かに／＼、

今日は九々の聲云へない人ないだらうな。

(子供達口々に「先生! 先生!」と呼びながら手を競ひあける。)

先生 よし／＼、

今日はみんな元氣だぞ、

君云つてみたまへ。

男児C 二二天作ノ五 二進が一進

三一什ノ一 三二六什ノ二 三進が一進。

男児D 先生! 先生!(手をあげて起立する。)

先生 何だ きみは?

男児D 先生、ちがふさうです、

商業學校にいつてる、

隣の正夫さんが云ひました。

先生 何がちがふんだよ、

途中で妙なことを云ひ出したら困るね。

男児D 九九の呼び方が、
ちがふといふんです。

先生 ちがやしないよ、

日本の大昔からの二二天作だ、
商業學校でどう教へてゝも、
わが何萬の卒業生は、

二二天作で立派に備はれてる、

銀行會社どこへでも通用してゐるんだ。

男児D でも、新式も教へて下さい、

正夫さんに負けちやうから。

(子供等勝手々にガヤ／＼云ひ出す)

男児E おいらも新式習ひてえな。

男児F 習ひたかつたら、

商業學校へ行けや。

男児A あいつ月謝も出さんで、

ぜいたく云つてるよ。

男児B さうださうだ、

よせ／＼。

先生 靜かに、靜かに、

今、商業學校で新式やつてるといふ話だが、

それは商業學校の話だ、

先生はなあ、何十年來二二天作をやつてる、

この間もなあ、

國際新教育大會いふんで、

西洋の教育家のお客様に、

算盤見せたんも、

國粹といふわけだ、

國粹といふものは、

さうむやみにかへるもんぢやない、

算盤は外國にやねえ世界一の算法ぢや、

今ちや國粹が新教育になつて來てる。

男兒D でも先生、正夫さんはね、

新式の九九は二一天作より分りやすいと、

きかねえんです。

先生 それや正夫君が二一天作を知らんからだ、

まあどつちにしろ、

割り算出來たらいいんだろ、

つまり文句云はんで、

さあ三進が一進の次は？

男兒C 四二二什ノ二 四二天作ノ五 四三七什ノ二 四進が一進

五一加一 五二加二 五四加四 五進が一進

先生 よしく、そこまで。

大變よろしい、

文句云はんでやつてるとうまくいく、

先生のいふ通りやつてれば偉くなる。

(黒板の標語を指さしながら)

「勤勉は成功の基」

これを忘れちゃならん、

さあ、いゝかね、

(大算盤の珠で數を示しながら)

十五萬三千五百圓の利益金、

この配當を計算するんだよ、

重役は四人、

社員及労働者はたとへ千五百人居たとしても、

重役一人分の配當でいゝだらう、

さあ重役一人あたりの配當は、

どう計算したらいゝか、分る人？

女兒B 先生、先生

十五萬三千五百圓を四で割ります。

男兒D 先生、それでは社員や労働者は一文も貰へません。

男児B 五で割ります、

先生 さうだ。

十五萬三千五百圓を五で割る、

みんなやるんだよ、

(みんなの算盤珠のはちかれる音、九九の聲が交錯する。)

男児A 先生！ 先生！

女児B 先生！ 先生！

男児F 先生！ 先生！

(その他の子供等段々手をあげだす。先生男児Fを指す。)

先生 はい、いくら？

男児F 三萬七千圓。

女児B 先生、先生ちがひます

三萬七百圓です。

先生 君はいくら？

男児A 三萬七百圓。

先生 さう、それがよろしい。

あつた人は手をあげて……

あゝ大分あつたね、よろしい、よろしい。

男児E 三萬七百圓、

重役はいゝなあ。

男児D いゝなあ、あたりまへよ、

おいらも重役にならあ。

男児C 何でお前がなれるもんか、

せいぜい重役の尻拭ひ！

男児F 何だ、ひよつとこ野郎、

ひよつとこはいつまでたつてもひよつとこね。

男児E 貴様だつて、いつまでたつても。

パタヤの小僧さ。

先生 これ／＼なぐりあひこしたら、

先生の頭は益々禿げるぞ、

御破算で願しましては……
みんな静かに静かに、
御破算で願しましては――

第三場

右方に工場の塀。煙突五六本。内三四本は煙を吐いてゐる。塀の右手は河畔の土堤につづく。夜空に星一ツ二ツ三ツ四ツ五ツ……。第一場に現はれた青年左手から、労働者（青年よりやゝ年長の者と更に年上の者）二人右手から。

128

青年 うん、偉い番頭だ。
一つの典型的な番頭だ。
入つては親爺の金を勘定し、

出でては無数の後継者を養成してゐるんだな。
勤勉は禿頭の基か、アハツハツ……
労働者イ おい、焼鳥一つやらねえか。
かう、精が枯れちややり切れん。
労働者ロ うん、おでんがいゝぜ、
一杯やりてえな。
労働者イ おい、女房が待つてるぞ、
一杯やるのはよせよ。
労働者ロ 女房はちやんと心得たもんさ、
今頃ぼつ／＼米でもといでらあ。

129

（青年は労働者と行違つてから自分のバツトの箱を拾ふ真似して。）

青年 きみ、きみ、これは、
きみら落したんぢやないですか。

労働者イ いや違ふよ、

きみベツト落したかね。

労働者ロ さあ……

(ポケットを手で探りながら)

僕のはちやんとある。

青年 ちがひますか、

どうも失禮、

きみ等の退け時あ遅いですね。

労働者イ 二時間の残業さ。

青年 ほう仕事がどつさりあつて、

結構なんだね。

労働者ロ 何、結構なもんか。

一時間が十銭増し、

労働量はまさに倍と来てらあ。

青年 きみ等は夜業はないんだらう。

労働者イ 晝夜交替制度だからね。

十二時間に残業二時間、

相当なもんだよ。

労働者ロ おい／＼餘りしやべるな、

どこで眼が光つてるか知れやしない。

(労働者二人急に歩き去る)

青年 うーむ、大分労働強化だな、

これちや運送船もせはしからう。

も少し、残業の連中を待つとしようか。

(川べりにうづくまる。バッドをポケットに入れる頬杖をついて瞑想の態。舞臺次第に暗く、幻想的場面となる。大空を背景として、星の精と煤の精と多数。)

星の精A まあ何て憎らしいんでせう。

煙突どもはしよつちう煙草をふかしてゐるわ。

星の精B よくも時計のやうに厭きないものね、

算盤學校は毎晩々々パチ／＼／＼やつてるわ。

星の精C もの腐つた臭ひがむかむかする。

まるでどぶ底みたいな下界——

星の精D あぶくがぶく／＼浮いて来て、

妾達の衣裳が汚れさうだわ。

煤の精一 何を上の方で暢氣なこと云つてるんだい、

下界たらもう大變なんだぞ、

どし／＼爐には石炭をはうりこみやがるし、

おれ達はぐん／＼空へ投げだされるんだ。

煤の精二 全く、全く！

世の中は變に息せはしくなつてきた、

まるで手傷を負つた野獸さ。

のたうちまはつて焔の舌を吐き、

熱い／＼息吹が俺達を驅りたてるんだ。

煤の精四 何のため、俺達は驅り立てられるか、

何のため、俺達は黒ずみ舞はされるであらうか。

俺たちは、今に、君達の顔を、

黒んぼにするだらう。

星の精A どうして、どうして、

妾等は眞理です、

美しさと正しさを示す光です。

星の精B さまよへる羊の群に、

道を示す牧者の瞳です。

星の精C 歴史は移つても、

うつろふことのない天壇の焔。

星の精D 不滅の光、

盡きぬほまれ！

煤の精一 君等の理想は高い、

君等の理想は燃えてゐる。

煤の精二 成層圏をはるかに越えて、

咲き誇る薔薇か。

煤の精三 俺達は君等の足許に、

くづをれうなだれる外ないだらうか。

星の精一同 妾達だつて、もつとく、

下界に降りたいんだわ。

煤の精一同 俺達だつて、もつとく、

天上に登りたいんだよ。

星の精A・C あれ、ごらん、

下界ではいよく何か起りさうだわ。

煤の精A・C あゝ時が来たんだ

時が来たんだ

(星の精達と煤の精との會話の行はれて居る一方下界では算盤學校の

大算盤をはじいてゐる番頭先生がスポットライトで照し出される、算盤玉のはぢかれるにつれて左手よりフロツクに金色假面の紳士がスポットライトに照らされて現はれ、一步々腹を突き出してゆく。次いで工場の陰から額にハムマアの描かれた假面を被つた労働者の群が同じくスポットライトに照らされスクラムを組みながら現はれる大算盤のはじかれるにつれて労働者達の腹はへこみ腰は曲がつてゆく。)

星の精・煤の精一同

さうだ、さうだ、

早く早く、握手しよう

早く早く、握手しよう。

(星の精達と煤の精達と握手。と同時に、下界の中央で紳士のふくれ切つたビール腹と労働者群の頭部と衝突して、ビール腹は破裂し紳士は腰を抜かす。労働者達一同腰は伸び両手をあげて萬歳のかたち。幕)

跋

一九三〇年四月、別名による第二詩集發刊以後の作品を全面的に収めたい意向で、最初この詩集を編んだ。併しその後種々の事情から考慮して、一九三三年までの作品は全部収録を差しひかへることにした。たとへまた今日に於て、之を収録するとしても作品それ自體の全面貌を非常に不完全なかたちに於てしか示すことほかできないし、それらを未刊の第三詩集として除外することとした。従つて本詩集は一九三四年二月創刊の「詩精神」以後に於ける作品集であつて、第四詩集に相當するものである。なほこの期間の作品に於てもわざと採録をさしひかへたものあることを諒としていただきたい。

本詩集は、便宜上四部に分つたが、必ずしも製作の順序によつてはゐない。ただ第一部から第二部、第三部へと、なるべく古いものから新しいものへの氣持で編んでゐる。第四部には詩劇一篇を載せた。三三年以前の作品を省いたので、最初は載せない豫定だつたものを採りあげることにしたのである。

作品に就ては彼此語りたくはない。作品それ自體の表現以上にもまた表現以下にも、全く何ももあり得ないわけだから。たゞ多く自己と社會と時代の交叉點に於て詩を把握しようと思圖したことだけを云つて置かう。

それにしても、何といふ目まぐるしい社會と時代の變轉推移であらうか。本詩集の發刊を發表した二月から今日まで半歳の間、このささやかな一部の詩集發刊をめぐるつて、ひしひしと身にせまつてそのことを感じさせられた。はじめ本詩集を發行する豫定であつた出版所は一切の出版を放棄し、われ／＼の所屬した詩人の團體は解散し、紙代印刷費は暴騰した。そしていま日支事變の眞たゞ中にある。

今日に於て、なほ所謂舊日の詩らしい詩を求める人々には凡そ無縁の詩集であらう。ただ自己と社會と時代の眞實を凝視め、それを愛してゆ

かうとする人々にこれをおくりたい。

一九三七年八月二五日

高圓寺青雲寮に於て

著者

追記

紙型になつてから、數篇の作品に於て、若干の部分を抹殺し、甚だ讀みづらいものになつたことをおわびいたします。

本詩集の上梓をおもひたつてから、今日に至るまで色々御心配いたゞいた諸君に、感謝の意を捧げます。(十月十七日、著者)

昭和十二年十一月十五日印刷
昭和十二年十一月二十日發行

定價金壹圓

詩 集
南 京 蟲
限 部
三 百 五 十

著 者 檢 印



東京市杉並區大宮前六ノ四五六
内野方

著 者 新 井 徹

發行者 高橋喜惣勝

東京市澁谷區代々木山谷一七三

印 刷 者 安田頼太郎

東京市澁谷區代々木山一七三

發 行 所 文 泉 閣

東京市澁谷區柏木一ノ一八

發 賣 所 鳳 文 書 院

東京市澁谷區柏木一ノ一八

印 刷 所 安 田 印 刷 所

終

文泉閣版